

遙拜し奉りて。

宮柱立をめしよりみしめ繩ながき恵のつきせさらまし  
十五夜の月、折から白川にて見し程に。

思ひきや身にしむ秋に白川の關もる月を今宵みんとは  
陸奥にまかりけるに、昌興雅丈のむまのはなむけに、  
待つとしらば白川の關もる月に心とむむな、など、  
仰られしほどに。

見せばやな待とし聞ゆ君にさて今宵の月をしら川のせき  
一、本多政長父子仲秋の作

故郷中秋の月得清明と云。本多政長父子詩歌。

今宵月澄ばすみけり人ごころ 政長

名にしおふ夜てる玉の秋の月 政在

雨は今朝月にさはらぬ今夜かな 政冬

今夜月秋より出る光かな 能順

中秋賞月仙臺 天淵政在別號

爽風薄暮度清商 仰見月華吐桂香。霜滿山巒千片影。珠  
池水一團光浮。何須詩席乘蘭燭。好是仙臺飛羽觴。檻外  
夜遊無限意。興來幽趣慰吟觴。

十四夜月

藏 六政多別號

暮天白露浮。爽氣恰如流。先愛九分月。何後圓滿秋。  
一、淺井源右衛門の追悼

廿月四日淺井源右衛門政右卒す。享年六十八。有名望人  
也。前御馬廻組頭也。不幸にして十五年以來、得惡疾致  
仕す。政右年頃連歌を好み、於本藩そのならびなかりし事  
など思ひつゞけて。警素菫

よしや身はあだなる露に比ぶとも詞の花は世にも朽せじ  
折から鴈のおとづれ侍りければ。

はかなさを告げこす露の玉章に鴈も涙やかけてきぬらん  
菊池武康の許に申遣ける。政右と實兄弟也

なげ木こる袖の時雨のいかならんさらでも秋の夕暮の空  
山崎延隆の許へ

言の葉もなき名忍ぶの草ごろも袂の露や置きまよふらん  
爲右追慕竹田忠張百韻連歌の發句、其外數十人有之。

其内數輩を擧て記す。  
影消て鴈と啼く世や夕月夜  
人の世を別れや長き夜の夢

本多政長

言の葉に残す形見か秋の色 同 政在

かゝれとて馴し秋かは袖の露 由比正及

袖しぼる外なき露の憂世かな 能順

馴し世や恨にかへる老の秋 同

哀てふぬしなき宿の紅葉哉 前波正晴

なき魂や結びとめなき袖の露 菊池武康

一、對雨述懷 閏月望

よしさらば後の今夜と待て見し山のかひなく曇る月かな  
うき雲の重る秋と成にけり待ちしこよひの月もくもれば

一、聖堂參拜と獻上品

閏月十八日昌平坂聖堂御參拜。御太刀馬御獻上。

雄 劔 一 握

右匣中裏面

武州昌平坂

大成殿新成。爲國爲道。喜而有餘。瞻仰不已。拜趨盡禮。謹

納青江守次所製雄劔一握。莊飾全具於廟內。以表寸忱。

元祿四年辛未閏八月令辰

加越能三國主正四位下菅原朝臣

御參詣次第。仰高門の外にて御下乗、此門内迄役人菊池新

三郎・中村新兵衛罷出、兩人御先に立て堂へ罷越す。御供

御番頭以下此門内坂下にて相残る。御徒以下は門外にして

残る。坂より上へは御先立土方勘解由也。御供三吉・助左衛

門・葛巻權佐・村宗次郎也。入徳門の右の方に手水鉢あり。

即御手水被遊候。雨天にして御手傘村宗次郎奉之。御手水

は權佐奉之。杏壇門の外に土方三吉相残る。此内階下也。

葛巻・村御供たり。杏壇門の外にして御刀被徹、葛巻持之。

階下にして御結を被解、階上板縁にして御扇子を被爲置、

於内陣御拜也。但御焼香は無之候。階を被爲上候節、烏帽

子・狩衣の人開御帳也。杏壇門の外にして御結被遊御刀被

帶、入徳門外迄菊池・中村奉送也。翌十九日大學頭殿へ時服

十領・御着一宮被遣、菊池・中村兩人へ與村伊豫書狀を以て

絹五疋宛被下之候。

一、原元昭へ餞別

二十日原九左衛門元昭、馬入御覽候處、應御意御既に被

立候に付、有賀甚六郎を以て御滿悅の趣御詫の上、爲代可

被下御馬不被爲思召當、最早明日金澤へ發出仕候條、